

1・学問の特性について

近代日本の特徴は応用学問から出発した。最古の慶応義塾は理財科からはじまっている。東京大学の前身は医学、法律、外国語などを寄せ集めたものである。いずれも応用学問である。文字通り専門学校から始まっている。この起源が近代日本の学問に應用重視という特徴を与えた。これはいわゆる文科系とか理科系にかかわらず言えることである。東大の学部でいうと名前からしてほとんどが応用学問である。医学部、工学部、法学部、薬学部、農学部、教育学部などで、基礎学問と辛うじてされるのが文学部、理学部、そして教養学部である。学長自体も異常な位医学部、工学部そして法学部出身が多い。したがって、近代日本の学問の特性を議論をするに当たっては圧倒的な応用系の比重に思いを致さなければ手ならない。人文系とか社会科学系とか自然科学系とかは第二次的な分類である。

2・自然科学系とは何か。

自然科学系は応用系がほとんどである。農学部、医学部、工学部、薬学部などは専門学校である。理学部をみても、実際に行っていることは応用系であることが非常に多い。自然を綿密に観察する自然科学者の数が非常に少ない。英国の代表的な科学雑誌は『ネイチャー』であり、自然観察が常に基礎にあることを思い出させる論文が少なくない。米国の代表的な科学雑誌は『サイエンス』であり、自然の理を発見しようという意気込みが出発点であることを思い起こさせる論文が多い。日本の科学雑誌は英米におけるほど発行部数が多い雑誌はない。しかも、私の知識の薄弱さによるところが多いことを認めつつも、自然を鋭く観察・分析というよりは、あるいは自然の理を究めるというよりは、物質を混ぜたらどうなるとか、薬物投入で体調がどのように変わるとか、水を大量に流したらどのような波が形成されるとか、実験的なものの比重が無闇に高い感じがする。それは日本の科学は応用科学の覇権下にあるのではないかと思わせる。物理学、化学、生物学、天文学、地学などといっても、応用系が過半を占めている。数学や論理学は自然科学ではないのに、そのような扱いを受けている。そもそも、自然を対象とする科学は人間社会を相手にする人文学と社会科学と同じかそれ以上に、学問の性格からみて多様性に富むのである。多様性が良く見えないのは一重に応用系が突出した比重を持ちつづけているからである。

3・人文学とは何か。

人間は自己表現力が豊かである。そこに人文学が栄える理由がある。人間は何を美しいと思うのか。人間は何を社会的に倫理的と思うのか。人間はその思考や感情をどのように形成しているのか、どのように表現しているのか。このような問い掛けを軸に人文学は成り立っている。哲学、美学、倫理学、心理学、社会学、教育学、芸術、歴史学、文学、音楽、演劇、映画などなどがそのなかに入る。人文学が自然科学と同様にあまりにも多様な学問

をいっしょくたんに扱っていることが分かる。心理学、教育学、社会学などの過半は生物学、医学、化学、物理学などとあまり変わらない実証科学的な方法を使っている。文学や音楽や歴史や哲学などの分野でも、体系的な実証科学的な方法の使用は米英では非常に目立つ。

4・社会科学とは何か。

人間社会はその活動が複雑で多様で活発なために、どのように社会は運営されているのか、どのような原理が社会変動を律しているのかは、古来理論的実証的規範的考察の重大な関心事であった。古代中国の『大学』に言う「格物、致知、修身、齐家、治国、平天下」のすべてとそれ以上を全部扱うのが社会科学であるといってもよい。社会科学の三大課題は説明、理解、批判である。説明とは体系的な実証的方法を用いた社会の動きを因果法則のように解釈を与えることである。理解とは人間主体がどのように現実を認識しているか、現実にどのような情緒表現で反応しているかなどを相手になったようにわかろうとすることである。他人の心など、他人の策略などわかるわけがないというわけではなく、一歩でも二歩でも相手に肉薄しようとする作業である。批判とは人間社会を規範的に見、人間社会を改善、向上、変革しようという視点から、社会に肉薄しようという作業である。三個の作業は普通排他的にひとつだけで終わらず、二つ三つを混合させることが普通である。説明では自然科学の方法と何ら異ならないといってもよい位である。あえていえば、社会科学において実験がどちらかという、その比重が少なかったというべきである。理解は人文学の方法と何ら異ならないといってもよい位である。違いと云ったら、言語表現にいくらこだわるのが社会学者のようである。批判は人文学との方法と何ら異ならないといってもよい位である。近年の趨勢は体系的に実証的な方法を使用する社会学者が増加していることである。しかし、米英に比べると、「行った、見た、書いた」の社会学者もかなり多い。

5・人文学と社会科学の分け方

以上のように、人文学と社会科学の学問の特性は「鉛筆と紙」の一言で片づくようなものではない。分け方としては米国ののが最も参考になる。全米科学財団は(1)行動・認知科学と(2)社会・経済科学に分ける。前者は考古学・考古計測学、文化人類学、地理学・宗教学、言語学、自然人類学、社会心理学、後者は経済学、法律と社会科学、政治学、社会学とする。注意すべきは日本のような法学はなく、法律を社会科学的に扱う分野のみが入っている。全米人文学基金は日本で通常考えているものから心理学、教育学を引いたものである。さきにも述べたが、世界最大の『行動・社会科学国際事典』は全米科学財団の分け方のうちでも、行動・認知科学が大きな位置を占める。そのなかには医学や工学も大きな位置を占める。全米科学財団の社会科学は普通に入っている。この事典は文理融合の強い事典である。社会科学の分野で日本からのコントリビューターの数は極端に少ない。

行動認知科学で日本のコントリビューターの数は多い。

6・社会科学における問題意識、研究対象、および研究手法の現代化の必要性

このような現代化は社会科学において普遍的知識の生産流通に日本の社会学者が寄与できるかに大きく掛かっている。社会科学の三大課題として説明、理解、批判としたが、記述はそのどの課題にとっても基盤作業として存在する。記述だけでことたれりとする限り、普遍的な命題を創出するかどうかを気にする社会科学にはなりにくい。日本の社会科学の特性として、応用学問としての特性と記述重視の法則的把握意欲の弱さという特性があるように思う。記述重視は最も重要なものではあるが、それだけに止まるのでは世界で相手にされる社会科学にはなりにくい。個別的な記述的な作業をそれでよしとする限り、ほかの社会学者にとっての有用性が低くなりがちである。いいかえると、応用系の過大重視と個体記述の過大重視が日本の社会科学をおそらく不当に過少評価される重要要因になっている。さらに第三の重要要因としてあげられなければならないのは、社会学者の使用言語が国語に過大偏重していることである。日本語は世界的にみて日本人以外の使用者が極度に少ない。国語で著作を発表している限り、業績が正当に評価されままでの時間が掛かりすぎになる。最悪の場合には、世界的には看過されてしまいがちになる。英語の水準は私達が学生生活を送った頃の教授の英語水準にくらべると、格段の向上があったことをまず認めなければならない。しかし、一流学術専門雑誌に掲載許可を獲得するためには、圧倒的な向上努力を必要とすることも認めなければならない。

すべて大学4年間のカリキュラムと教授方法の格段の向上なしには不可能である。そしてそれは大学学部の解体的再編成と教授任用昇進方法の抜本的改変を必要とする。カリキュラムの単位数は多分多すぎる。米国ほど少なくする必要はないが、習得単位数が多すぎてどの科目も熱を入れないことになりがちである。カリキュラムも適切なガイダンスがないことが多い。学生は無案内の動物園に入った状態になりがちである。学部再編成も必要で、法学部や経済学部は必要がないのではないだろうか。専門学校の役割は専門職業大学院でなされるようにしたらと思う。学術大学院は学科単位で構成し、学問の深部を究めることが目標とする。教授も任用昇進方法を大きく変更しなければならないだろう。そのためには教授評価がより強力になさなければならない。私の考えでは、本と論文の刊行、その水準だけでなく、本と論文が引用される頻度、本や論文で提出された考えに対する反応の数なども、数量的評価をなさなければならない。社会科学や人文学では不可能と主張する向きもあるが、それは多くの場合、強弁である。アマゾンやグーグルでかなりのことはわかるし、数値化されている。英語でないとダメというわけではなく、世界一流学術雑誌で刊行されている論文で言及される限り、件数になる。このような教授評価方法を慣行とすれば、次第に英語で論文を書か頻度が増えるのではないだろうか。

英語で発表すると一番よいことは反響が非常にあることである。反響があることはそれで考えが深まる、まちがったところが訂正される、さらによいことは論文執筆時に行う検索が深まる。英語検索システムは日本検索システムの百万倍も充実している。日本語の洞穴に閉じこもっている限り、宇宙はなかなか広まらないのである。

reference

National Science Foundation

National Endowments for the Humanities

International Encyclopedia of Behavioral and Social Sciences, 26 vols., edited by Neil Smelser and Paul Baltes, New York: Elsevier, 2001.

Google scholar

Amazon.com 『社会科学入門』猪口孝 著 中央公論新社 1985 年

『トンボとエダマメ論』猪口孝 著 西村書店 2007 年

『猪口孝教授 略歴と業績』猪口孝 著 2007 年